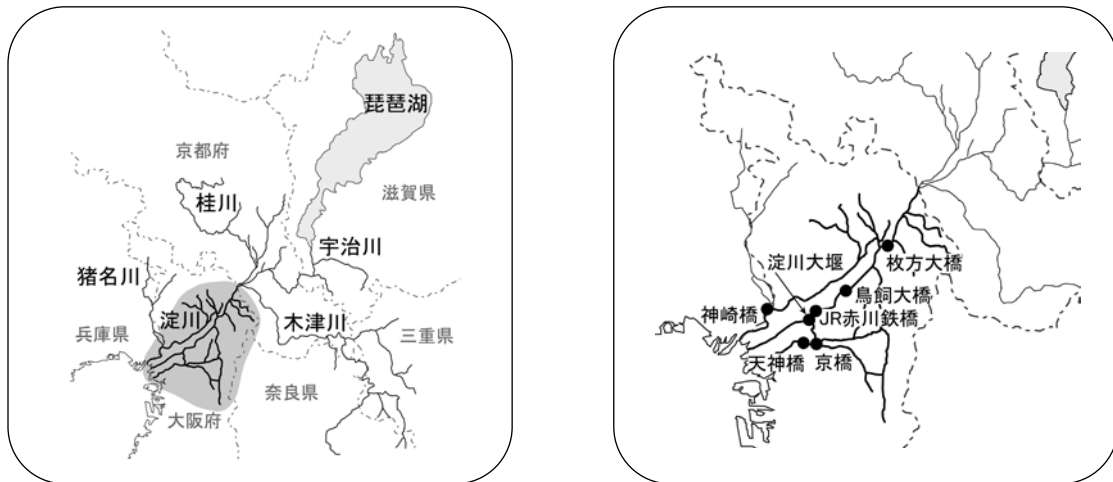


5. 淀川

宇治川・桂川・木津川の三川からなる淀川の水質は、合流後ただちに混合しないことから各支川の特徴を反映して、桂川の影響を受ける右岸の方がより汚濁が進んでいた。しかし、昭和50年代中頃よりその差はほとんどなくなってきた。

大阪市内の河川は概して自己流量が少なく、また大部分が感潮区間であるため、淀みがちで自浄能力があまり高くなく、昭和40年代の淀川上流域の急速な市街化進展により水質汚濁が進行してきた。近年は、排水規制強化や下水道整備等の促進によって、その水質が改善されてきているものの、依然として他の河川に比べると汚濁レベルは高い。

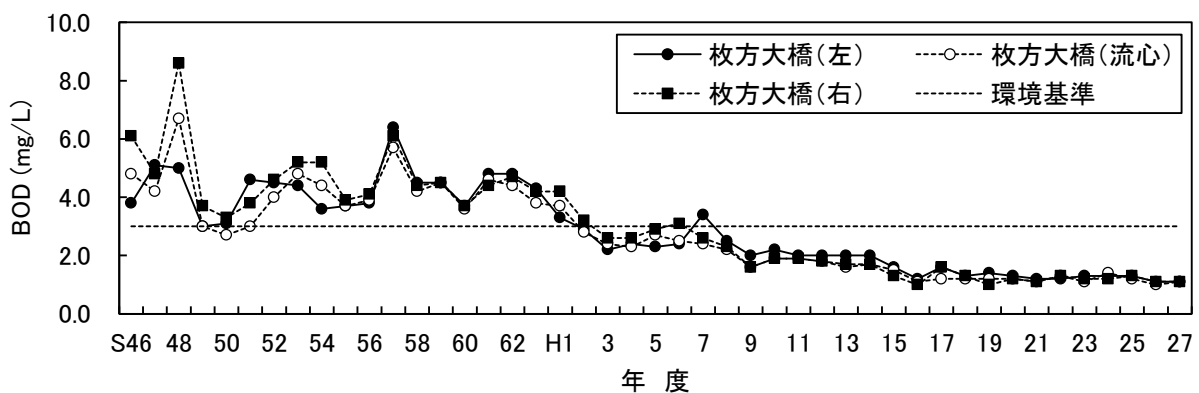


(1) 淀川上流

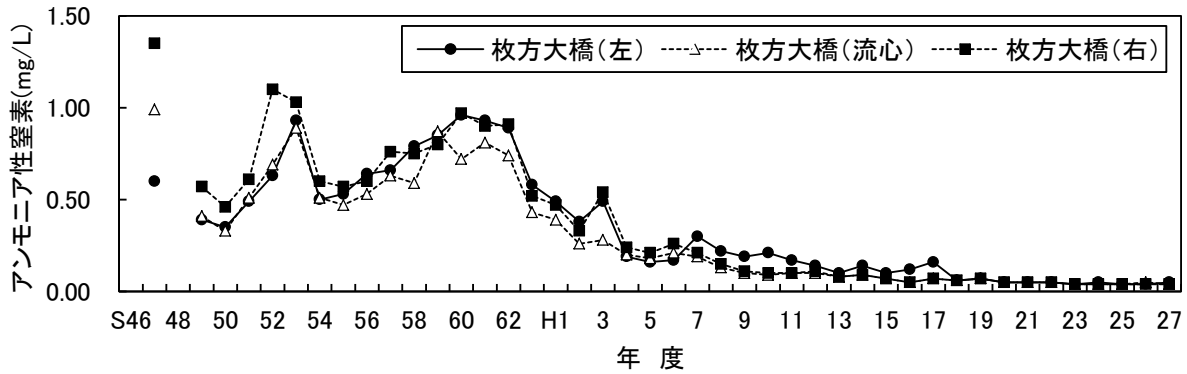
枚方大橋の左岸、流心、右岸での BOD (75%値) は、昭和 57 年度に 5.0mg/L 程度の高い値を示した後、改善されてきている。平成 27 年度は、左岸で、流心、右岸のすべてで 1.1mg/L であり、環境基準値 (3.0mg/L) を達成している (図 3-46)。

アンモニア性窒素 (年平均値) は、昭和 60 年度に 0.72~0.97mg/L を示したが、以後急速に改善され、平成 27 年度は枚方大橋の左岸が 0.05mg/L、流心と右岸が 0.04mg/L となっている (図 3-47)。

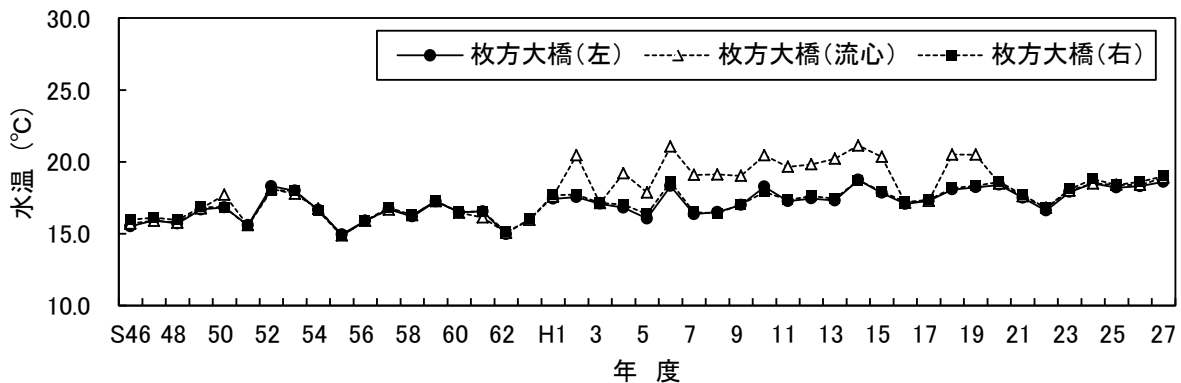
水温 (年平均値) については平成 2 年度以降、右左岸に比べ流心部で高い傾向がみられたが近年は差がない (図 3-48)。



【図 3-46 淀川上流の BOD (75%値) の推移】



【図 3-47 淀川上流のアンモニア性窒素(年平均値)の推移】



【図 3-48 淀川上流の水温(年平均値)の推移】

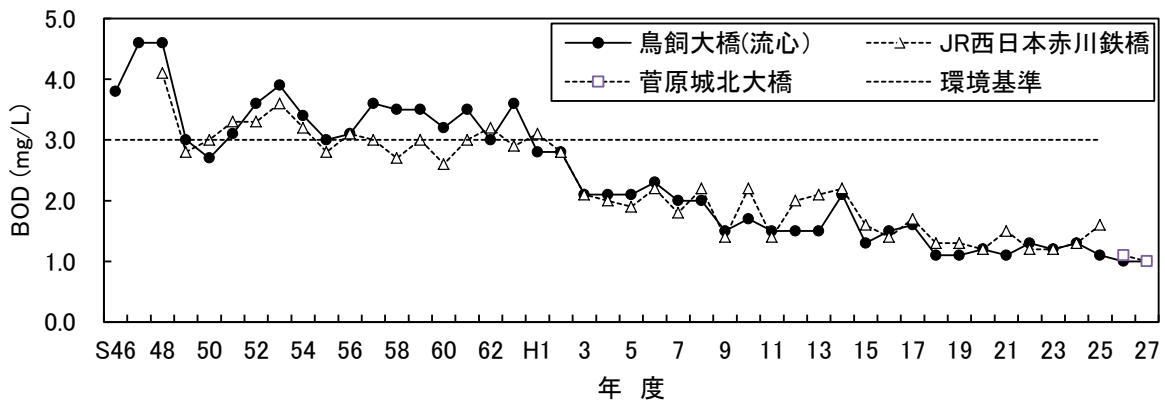
大阪府 HP「公共用水域の水質等調査結果」より作成

(2) 淀川下流

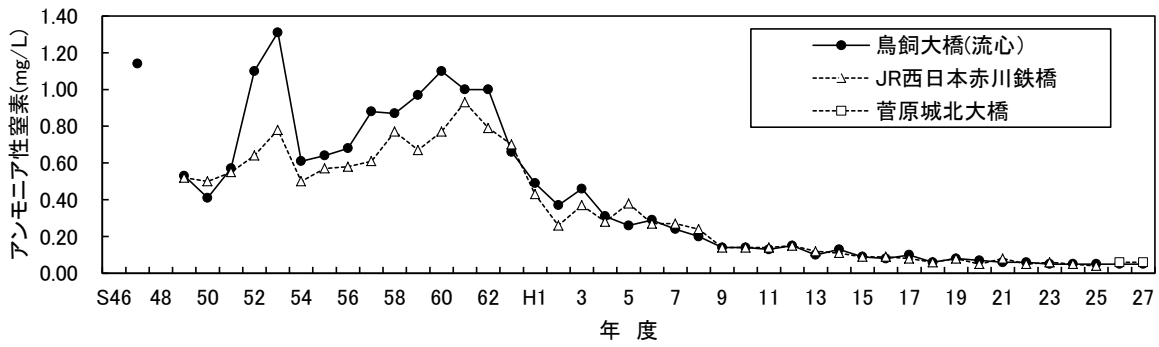
淀川下流の鳥飼大橋流心、JR 西日本赤川鉄橋での BOD (75%値) は、昭和 40 年代後半から徐々に改善されてきている。平成 27 年度は、鳥飼大橋流心が 1.0mg/L で、JR 西日本赤川鉄橋の撤去に伴い、平成 25 年 10 月新たに観測地点となった菅原城北大橋も 1.0mg/L であり、環境基準値 (3.0mg/L) を達成している (図 3-49)。

鳥飼大橋流心でのアンモニア性窒素 (年平均値) は昭和 60 年度に 1.1mg/L であったが、昭和 62 年度以降急速に改善された。平成 27 年度は 0.05mg/L であった。JR 西日本赤川鉄橋の撤去に伴い、新たに観測地点となった菅原城北大橋は、平成 27 年度も 0.06mg/L であった (図 3-50)。

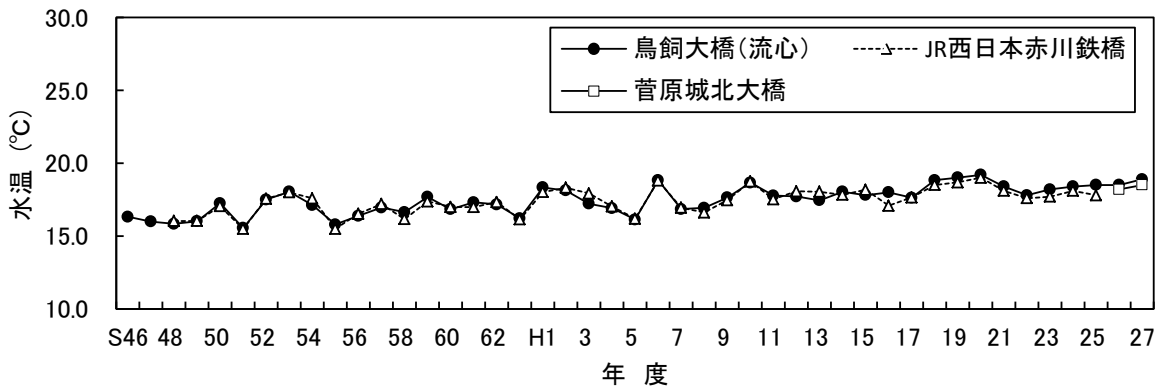
水温 (年平均値) については上昇傾向が見られる (図 3-51)。



【図 3-49 淀川下流の BOD (75%値) の推移】



【図 3-50 淀川下流のアンモニア性窒素(年平均値)の推移】



【図 3-51 淀川下流の水温(年平均値)の推移】

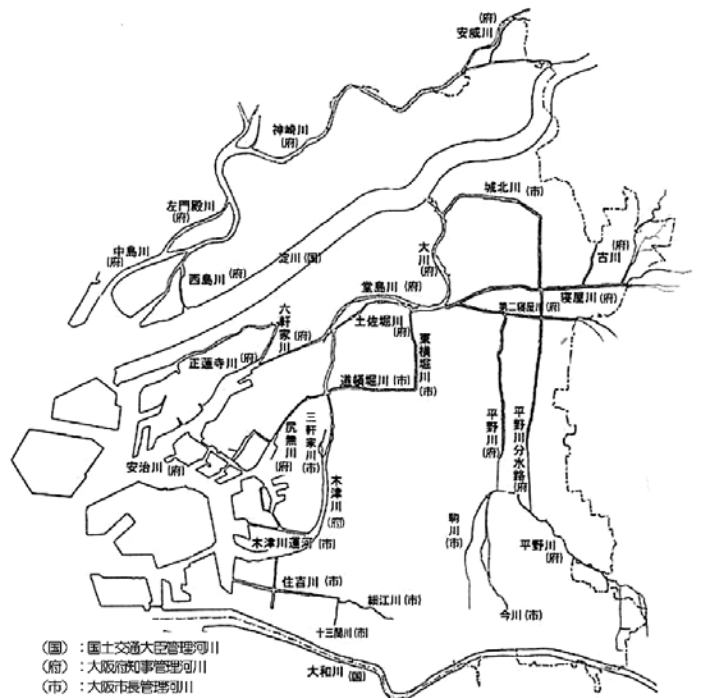
大阪府 HP「公共用水域の水質等調査結果」より作成

(3) 大阪市内河川

大阪市内河川の BOD (75%値) は、昭和 40 年代中頃まで非常に高い値を示していたが、その後は改善傾向を示している。平成 27 年度は、神崎橋で 1.2mg/L (環境基準値 3.0mg/L)、京橋で 3.7mg/L (環境基準値 8.0mg/L)、天神橋 (堂島川) で 1.3mg/L (環境基準値 3.0mg/L)、天神橋 (土佐堀川) で 2.0mg/L (環境基準値 5.0mg/L) であり、環境基準値を達成している (図 3-53)。

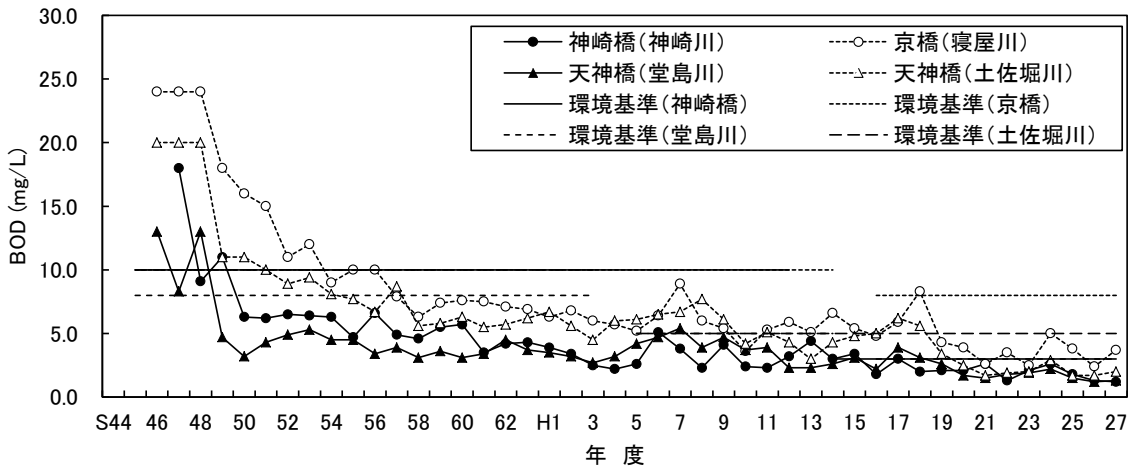
水温 (年平均値) については大きな変化は見られない (図 3-54)。

なお測定回数は、神崎橋は年 4 回に対して、他の 3 地点は年 12 回である。

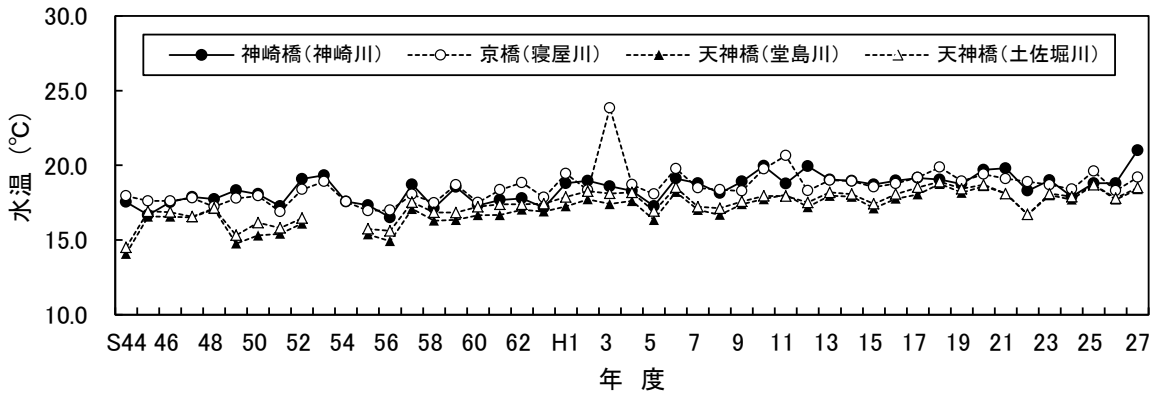


【図 3-52 大阪市内河川】

出典：大阪市「環境白書」



【図 3-53 大阪市内河川の BOD (75%値) の推移】



【図 3-54 大阪市内河川の水温(年平均値)の推移】

大阪府 HP「公共用水域の水質等調査結果」より作成